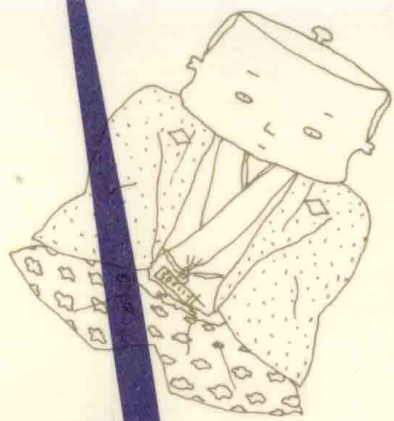




理論社

定価2900円(本体2816円)

ISBN4-652-01927-0 C0393 P2900E



今江祥智 の本

第27卷

縞しまのチョッキ

理論社

今江祥智の本第27巻

一九九一年二月初版

一九九一年二月第一刷

著者 今江祥智◎

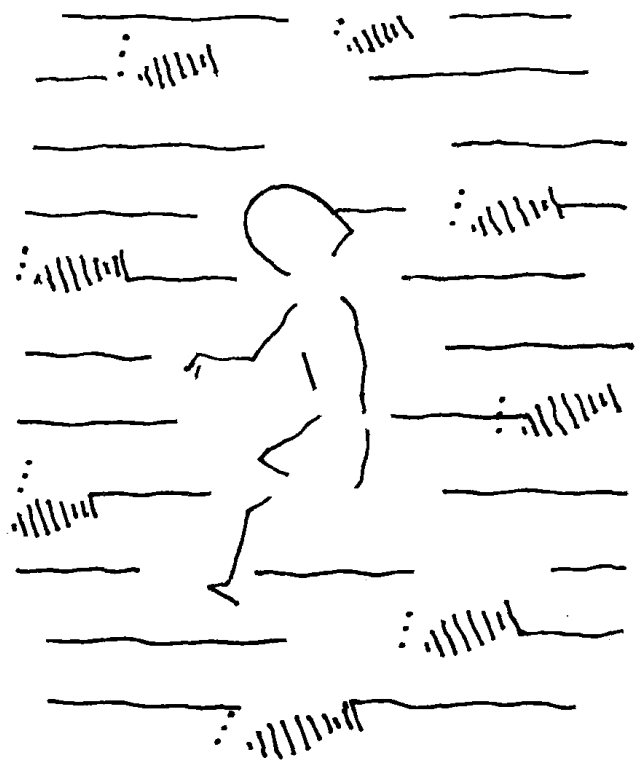
発行 株式会社理論社

東京都新宿区若松町一五―六

電話〇三(三二〇三)五七九一〈代表〉

振替東京九―九五七三六

落丁・乱丁本はお取り替えます。



第一話 薔薇猫	179	
薔薇猫ちゃん	177	
美しい瞳	164	
ハリウッド	149	
四輪馬車	133	
枯葉	119	
縞しまのチョッキ	105	
ルナ・パーク	90	
コーヒー畑	75	
指揮者は恋している	61	
ぼくのスマイレちゃん	48	
お勘定	35	
心ならずも	21	
歩きながら	9	
縞しまのチョッキ		7

第二話 浜簪花簪 183

第三話 桃始笑 187

第四話 若葉の候 191

第五話 花盗人 195

第六話 まじないルピナス 199

第七話 十二分の一のブルジョア 203

第八話 グラジオラス笑う 207

第九話 犯人はだれ？ 211

第十話 美しい本 215

第十一話 山茶始開 219

第十二話 薔薇窓 223

エピソード——街角 228

あとがき 233

解説 串田和美 235

編集 小宮山量平

装幀 平野甲賀

装画 長新太

制作 山村光司

発行 鈴木良司

製作担当 金井重雄

下向実

編集担当 日比野茂樹

高林久美子

成澤栄里子

製作 P & P

本文 加藤文明社／よねむら写植

表紙 ダイニツク

カバー トラヤ印刷

製本 誠製本

用紙 十条製紙／日興紙業

今江祥智の本
第27巻

縞しまのチヨッキ
薔薇猫ちゃん

縞
しま
の
チ
ヨ
ッ
キ

歩きながら

1

決心することはなんでもなかった。しかし、いざやってみるとなると、ひとくろうもふたくろうもあり——とうとうこのとしになってしまった……と、トクリはためいきをついた。

トクリはダックスフントのおすで、この家にもらわれてきたまだおさないころ、品のいい徳利みたいな姿だったから、そう名づけられた。それなのに、この徳利はぐんぐんそだち、胴ものびて、徳利にすれば一升は入ろうというからだつきになった。はやくいえばトクリは、一升びんをよこにしたのに、みじかいあしをつけたようなかっこうになった。

そのトクリが、あることを決心し、それをやってのけられたのは、この家で飼われるようになってから十一年めのことだった。人間なら、そろそろ七十歳というところだから、トクリがこのとしになって、なげくのもむりはなかった。

ことのはじまりは、トクリがいつものように寝そべりながら、だれかがつけっぱなしにしたテレビをぼんやり

みていたことからだ。テレビには、トクリのみしらぬ犬がいろいろうつっていた。よその国の犬らしく、そのことばもトクリにはわからなかった。おまけにみんなチョッキをきせられ、おかしなほうしまでかぶらされていたから、できることならトクリはチャンネルをかえたかった。そんな、犬のつらよごしみたいなかっこうをさせられているのを見るのがいやだったのだ。ところがとつぜん、れんちゅうがいっせいに二本あしで立ったのである。立ってそのまま、とことこ歩きだしたのである。

（あれが犬のすることか……）

と、ほったたをふくらませていたトクリは、れんちゅうがそのままいくらでもきよくに歩きつづけるのを見ているうちに、おどろきの目でながめるようになった。

（あんなことが、いったいどうしてできるのか）

と、おもいだしたのである。二本あしで立って歩くなんて、トクリは、うまれてからかんがえたこともなかった。この家の人たちは、トクリに「げい」をしこまなかった。犬は犬のままでしぜんに——ということ、せいぜい三つくらい「げい」だけおしえた。オアズケとオスワリとユクゾである。だからトクリは、気ままにそだった。よその飼犬のように、主人にやたらといいつけられることはなかった。だからたいいのことばは、トクリがじぶんでおぼえていったものだ。

とにかくテレビのなかの犬は、そろってまるで人間のように歩いていた。

そこでトクリは決心したのだ。じぶんもあれができるようになってみよう……。

しかし、いざためしてみると、みたときほどかんたんではなかった。それにまず、ダックスフントのからだつきそのものがよろしくなかった。胴長であしがみじかいのが立ちあがろうというのだから、むずかしいのである。ソファに前あしをかけ、よっこらしょ……というふうに立とうとするのだが、からだがふらつくのである。トク

った。だからトクリはその棚の本の背に、なんとも鼻をこすりつけてやった。すこしばかりしめっぽい本のおいは、まるで石ころとおなじだった。

けれど二段めの本の背に目をちかづけてよくみると、トクリの気もちをひく（しかもトクリにもよめる）文字のものがならんでいる。

男の料理。食べてびっくり。シチューのつくりかた。人イヌにあう。犬のことば。めいわく犬。きみは猫である。ぼくが猫語を話せるわけ。ねこに未来はない。けんかえれじい。しあわせづくり。……

これならむりしてページをめくってでも、目をとおしてもよいとおもった。ねこに未来はなくても犬にはあるのか？ それは犬であるトクリのしあわせづくりにもかかわることだった。けんかのあとで^{ユレジイ}かなしみをかみしめたことはトクリにもなんどあったことか……。

そんなことをかんがえるようになったのも、立つことができ、歩きながらかんがえるようになったからだ。これまでのように、寝そべってぼんやりとものおもいにふけるのはちがうのである。なんというか、しゃっきりとものごとをかんがえなくなるのだった。二段めの本の背をみていつて、トクリはくろうして文字をよめるようになっておいてよかったとおもった。おじょうちゃんのペンきょうのとき、いつも机の上にあげてもらってよかった。おじょうちゃんにしられないように、いつのまにかあるていど文字がよめるようになってよかった……。

二本あしで立てるようになり、歩きながらみつけたのは、前あしのつかいかたということだ。それまでは、ただの前あしとして、トクリの長い胴の前はんぶんをささえていただけのものが、こんどはほかのことにつかえるのだ。前あしがあまってきたのである。これはもう、サルが木からおりて二本あしで歩きはじめたことが、人間になっていく第一歩だったのとおなじくらいいいできごとだった。

そしてトクリは、その前あしを、本をよむことにつかおうとかんがえつた。二本の前あしで本をとりだし、本をひらき、ゆっくりよんでいってページをめくる。なんてすてきなんだ。まるで人間みたいじゃないか……。目のほうはまだまだたしかだから、すこしくらい本をよみすぎてもつかれはすまい……。

トクリはうまれてはじめてじぶんがよむ本を、じぶんの前あし——いや、手でとりだした。ゆかにおいてひろげた。こまかな文字がトクリの目にとびこんだ。小さなムシがとびかっているようだ。トクリはウホンとせきばらいしてから、さいしょのページをよみはじめた。

火事になったら、一枚のレンブラントより一ぴきのねを救おう。そしてそのあとで、そのねを放してやろう。

アルベルト・ジャコメッティ

ふん。トクリは鼻をならした。レンブラントはしってるぞ。いつか主人が話していた絵かきのことだ。その絵はだれも買えないくらい高いこともききおぼえていた。それよりもねこだと？ ジャコメッティがどんなやつかはしなかったが、やな人間だというあてはついた。犬ならどうするつもりなんだ……。

トクリははらをたてていた。本というものがこんなふうに気をたかぶらせるものだとは思ってもみなかった。目がかすみ、文字がおおき、かわりに頭のなかに、これまであいてにしたなんびきもののらねこどもの顔がうかんできた。くろいの、しろいの、ぶち、しましま、かた目。トクリは、ねことはしょうがあわないのだ。そのねこに未来がない——などといった題の本だからよみはじめてやったのに、のっけからねこのほうがレンブラントよりだいじだとはなにごとか。

トクリはそんなことをかいたジャコメッティという人間をあらわす文字にきばをむき、ひとこえほえてやった。

トクリはじぶんが本をよんでいることをわすれていた。本の文字のむこうにちらつくねこどもの顔や、ジャコメッティという、みしらぬ男の顔にむかってきばをならしていた。だから書斎のドアがあげられ、いつのまにかかえっていたおじょうちゃんがそっと入ってきたのに気がつかないでいた。

—まああ、とうさんったら、また本をほうりだしたままにして。トクリ、本にほえたりしてはだめ。

トクリはどきんとなってふりむいた。よかった。本をよんでいたとは気がつかなかったみたい。トクリは本とじゃれているふりをした。おじょうちゃんはいそいで本をひろいあげた。

—『ねこに未来はない』ですって。トクリがよろこびそうな題の本なのに、ほえつくなんて……。ひとりごとをいいながら本をもとのところへおさめた。そしてトクリに、

—ユクゾ。

と、こえをかけた。本よりさんぽ。トクリはなにくわぬ顔になって書斎からかけだしていった。

2

—ゆっこ。

とうさんがよんでいる。弓子は書斎へ入っていった。

—ここにあった『めいわく犬』って本しらないか。

—しらない。ゆっこ、そんな本よまないもん。

—おかしいな。たしかきのうここにあったんだがな……。